

アジア諸国の国際観光社会学研究

— ヨーロッパ「世界経済」と国際観光 —

根 橋 正 一

- 1 章 問題と仮説
- 2 章 グランドツアーからマスツーリズムへ
- 3 章 背景としてのヨーロッパ「世界経済」
- 4 章 「世界経済」への編入とアジア諸国の観光地化
- 5 章 アジア国際観光研究の視点
- 参考文献

1 章 問題と仮説

われわれは文部科学省科学研究費（海外学術調査）助成を得て、2003年度より「アジア諸国における観光に関する包括的研究」に着手した。日本および韓国・中国・台湾の東アジアの国々ばかりでなくベトナム、スリランカでも調査を行い比較研究を計画している。初年度である2003年夏には韓国およびスリランカでの調査を行い、冬季には国内および中国・ベトナムでの調査を予定している。本論はその研究の方向性を示すための予備的研究である。

観光研究をする人たち、あるいは観光に携わる人びとの多くが、観光研究をアジアからスタートさせることに疑問を呈するであろう。なぜ観光先進国からの研究ではなく、後進地域と見られるアジア諸国に焦点を当てた研究に取り組もうとするのかを説明しておかなければならない。われわれの研究は観光振興を第1の目標とする研究ではなく、国際観光を国際社会学の視点から分析しようとしているからである。まず、国際社会学の研究視角に関する駒井洋の議論に注目しておこう。駒井は、国際社会学では地球社会全体をひとつの単位として取り扱うことが基本であり、さらに中心諸国のみの検討からは国際社会学的な認識が発生しないと主張する。なぜなら、中心諸国が存立している基

盤はまさに第3世界との関係にあるからである。逆に第3世界から見るとき、地球社会の存在状況はきわめて明白に理解される。第3世界は中心諸国から収奪されている存在であり、そのメカニズムの解明が地球社会のあり方を逆照射するからである（駒井：6-7）。国際社会学の視点は低発展諸国に置くことが肝要であり、とくに国際観光という国際的な消費活動を研究するには低発展国側からの視角がさらに重要となるのである。

ところで国際観光の基本的な移動は、北の豊かな国々から南の諸国へというのが主流をなしていることは周知の事実であるが、このことを理解するには国際経済構造から出発しなくてはならない。すなわち、アジア諸国の観光研究のための基礎的な研究として、ヨーロッパ「世界経済」と近代観光との関係を取り上げなくてはならない。

17-18世紀ヨーロッパ「世界経済」における、中核の北方への移動と南ヨーロッパの半辺境化の過程。北方ヨーロッパ有閑階級による南ヨーロッパへのグランドツアーの台頭。近代世界システムと近代観光の関係に関する考察。この時期まだアジア・アフリカなどはヨーロッパ「世界経済」へは組み込まれていなかったため、グランドツアーという近代観光はヨーロッパ圏内の半辺境・辺境地域をその目的地としていた。そしてアジア諸地域は、18世紀後半になってヨーロッパ「世界経済」に組み込まれたが、その後にヨーロッパ人の旅行目的地となってくる。

また、私的所有に由来する経済的格差にもとづいて出現する有閑階級こそが、観光の担い手であった。各地域、各時代、そして「世界経済」における中核および辺境におけるそれぞれの有閑階級がそれぞれあり、「世界経済」の拡大によって、中核地域全体が観光を享受することが可能な有閑階級化する。これは中核地域における観光のマス化、大衆化という過程に引き継がれ、有閑エリアとでもいうような国や地域を単位とする現象となる。資本主義社会がワーラーステインが論ずるような地域、すなわち中核-半辺境-辺境などの地域論として認識されるべき時代においては、有閑階級論もエリア概念で考察されねばならない。

これらのことを示すために、まず17世紀以降のグランドツアーに関する状況を諸研究を通して紹介するとともに有閑階級論に注目する（2章）。次にワーラーステインにそって、「世界経済」の中心の北方への移動と南ヨーロッパの半辺境化について整理する、半辺境化したスペインやイタリアへの旅行者の増大についてブローデルの研究を確認する（3章）。その後アジアが「ヨーロッパ世界経済」に組み込まれるとともに展開されるアジア諸地域における観光産業の形成・発展・展開について、各地の初期のホテルに関する情報から整理する（4章）。最後に本研究をふまえた、アジアの観光研究の方向性についてのべる（第5章）。

2 章 グランドツアーからマスツーリズムへ

現代のグローバル社会は経済的には単一のワールドシステム＝世界資本主義システムの時代であるとすれば、現代の国際観光研究の始まりもこのシステムとの関係から考察されねばならないであろう。そこでワールドシステムがヨーロッパ地域内でのみ機能していた当時の国際旅行であるグランドツアーから検討をはじめよう。

1. グランドツアーの時代

17世紀新しい旅行形態が、はっきりしたかたちで生まれてきた。騎士旅行とか大旅行(グランドツアー)、ヨーロッパの紳士旅行といわれるものである。それ以来この旅行は上流階級の教育課程や遊覧旅行計画に組み入れられた。発見旅行と探検旅行を兼ねて故郷を出発したルネッサンスの大旅行家にならって、今度はヨーロッパの王子や上級・下級の貴族、将来の政治家や外交官、裕福な素封家の息子たちが続いた。彼らは、旅行総責任者、「こびへつらうお付きと、何の役にも立たない徒食の輩」、召使い、御者を引き連れて旅した。将来の職業の準備として、彼らは「文明の発達したヨーロッパを型どおり巡歴する旅」に送り出されたのである (Löshburg: 66)。

E.リードによれば、15世紀末から17世紀初頭にかけて教育の一環として息子を海外に出すというイギリスの上流階級の習慣が、はじめは実験的試み、ついで慣行に、ついには制度となった。しかし、このグランドツアーは少なくとも2つの先行する伝統が結合したものである。ひとつは、若き騎士が修行の仕上げに行う遍歴であった。もうひとつの起源は、ペレグリーナティオ・アカデミカ、すなわち学者が学問の過程が終わりに近づいたところに、パリやボローニャのような学問の中心地を巡る学者の「1本立ちのための旅行」であった。騎士見習いの入団のための遍歴とペレグリーナティオ・アカデミカとがグランドツアーのなかで融合したものである (Lead: 238-239)。

16世紀にイギリス貴族を先駆けとして、フランス経由でイタリアに向かう教育的な目的を持つグランドツアーが始まり、当初はゆっくりと染み渡るように広まっていったのではあるが、18世紀までにはしっかりと日常的なものとして制度化されていった。「イタリアに行ったことのない男は、普通の貴族なら当然見るべきだとされているもの、すなわち地中海の海岸を見ていないがゆえに、劣等感さえ感じた」といわれた。南への旅行は、時間的に過去にさかのぼる旅というばかりでなく、西欧文明のルーツを探し求める旅でもあった。そのなかで、北方からやって来た若き男性貴族たちは当地の上流社会との交流を通して、人生に必要なマナーを仕上げる機会を得たのである (Löfgren: 157)。

イギリスでは資本主義の発達が早くから始まり、それに応じて財をなした上流階級が形成され、当時の旅行では特別な役割を演じていた。彼らの海外旅行の目的は、「ところにより変わる各地の特徴、さまざまな生物やその他のものに目を配って楽しむことで

あり、地球全体という巨大な木からものを理解することであり、旅が長ければ長いほどそれだけ多くを見聞し、啓発され、研ぎ澄まされ、利口になって…、こうして旅で学び取ったすばらしいことを、将来運良く帰還したら故郷に伝えたいということ」であった。このグランドツアーからヨーロッパ独特の外国旅行が始まった。お定まりのルートは西ヨーロッパへ南ヨーロッパへと、若い紳士は旅をした。例えば、マルセイユからイタリアの西海岸を通過してローマ、ナポリ、そして北へ向かってヴェネツィアへといった具合である（Löshburg：66-67）。

グランドツアーがはっきり確立したのは17世紀の終わりであった。これは貴族や紳士階級の子弟が行った旅行で、18世紀後半になると専門職に就く中産階級の子弟もこれを行った。1600年から1800年にかけて旅行は学術に力点がおかれたものであったが、これが百聞は一見に如かず式の旅行にシフトしていった。旅行体験の視覚化ということが生じ、「まなざし」の発生が生じたのである。これを助長したのがガイド・ブックの発達であり、それは新しい見方を奨励していたのであり、ツアー自体の性格をも変えていった。初期は「古典的グランドツアー」で情緒的な自然観察とか画廊や博物館、高級な文化的作品の記録というかたちであったが、19世紀には「ロマン主義的グランドツアー」へと変わり、風景観光とか美や崇高さというもっとはるかに個人的で感動的な体験の勃興が見られたのである（Urry：8）。

2. マスツーリズム化—有閑階級の変容—

ところで旅行を含むレジャーを創出し、発展させてきた主要な人びとを「有閑階級」と命名したヴェブレンは次のように論じている。

有閑階級とは、生産的労働を蔑視し、資産したがって威光を誇示する為に非生産的なことがらに時間を消費する階級であり、奴隷・動産・不動産の所有に基づく利子生活者、貴族、資本家階級など、その財力のゆえに生計維持のための負担と配慮をまぬがれて、もっぱら文化的方面の活動に専念できるような部類の人びとである。有閑階級は私有財産制の発生とともに成立し、掠奪文化の段階から貨幣的文化の段階への推移につれて完成される。富・貨幣の獲得と蓄積は当然の結果として、生活の愉楽を増大する財の消費を可能とする。肉体的生産労働の忌避をともなった財のおびただしい浪費は、名声や威信の高さを間接的に表現することになるところから、生産的労働と結びつきのない、したがってレジャーとは物質的に結果をもたらさないような活動によって閑暇を消費する生活様式である（Veblen）。

ヴェブレンは有閑階級の出現が私有権の始まりと一致していたという。最も初期の所有は、共同体内の肉体的に優れた男性が女性を所有することであり、それはより低い文化段階の野蛮時代に生じた女性の捕虜を始まりとした。さらに拡大して奴隷制をもたらした。さらに拡大して、彼らの勤勉が生み出したものの所有にまでおよび、ここに人の

所有のみならずものの所有が始まる。所有は、生存とは無関係な制度に変貌する。財の所有が人びとの尊敬を勝ちとる基盤になれば、それは自己満足や自尊心の前提条件となるのである。蓄積によって追求される目的は、共同体の他の人びとに比べて金銭的な力で優位な地位に格づけられることである (Martindale : 429)。上流の金権階級では、彼らも勤勉や儉約への衝動を持っていたが、その行為が金銭上の競争という純粋な要請に圧倒されていることがわかる。富と権力が証拠として提出されねばならない。なぜなら尊敬はこの証拠に基づいてのみ与えられるからである。富と権力を証明する直接的な方法のひとつは、余暇を誇らしげに見せびらかすことである。余暇は収入をもたらず勤勉さとはまさに対照的なものだからである。狩猟やスポーツも略奪的衝動の純粋な行使であった。労働を行わないということは名誉な、称賛に価することであり、品格の先行要件である。労働はその有閑的な共同体の目から見れば不名誉なものであり、高貴な人びとにとって道徳的に不可能であり、価値ある生活とは両立しえない。ところで、「余暇」とは、非生産的な時間の消費を意味する。あらゆる種類の象徴－トロフィ、位階体系、称号、学位や徽章、さまざまな紋章、メダル、名誉を表す装飾品－はすべて宣伝手段である (Martindale : 429-430)。

グランドツアーはまさにヴェブレンの言う有閑階級のレジャー活動の一環であった。すなわち、グランドツアーは金持ちの子弟たちが主として行ったものである。こういう「観光」は労働から離れて行う余暇活動とはいえない。彼らがもともと労働に携わっていなかったからである。さらに学習とか教育とも無縁の旅ではなかったのであり、むしろこれが旅の大きな要素であったのである (Urry : 271)。ターナーの1547年～1840年の151のグランドツアー分析によれば、それへの参加者の16.6%は貴族や領主階級に属していた。これらの階級は全人口のなかで2.3～2.5%を締めていたにすぎないにもかかわらずである。残りのグランドツアー旅行者84.4%は、全人口の4.4～6.7%を占めるにすぎないジェントリー、聖職者、専門職、商人や軍人であった (Böröcz : 25)。19世紀以前には上流階級以外のものが労働とか仕事と関係のない理由で何かを觀に、どこかへ旅するということはなかった。この点、近代社会での大衆観光の大きな特徴は、あらゆる年齢層の大衆が基本的労働と関係のない動機でどこかへ出かけ、何かにまなざしを向け、そこに滞在することである (Urry : 9)。

まさにこの時期旅行を形成した主体は有閑階級と呼ばれる人びとであったが、次第にレジャー活動は中産階級、さらには労働者階級へと拡大していった。次にイギリスを事例として、こうした有閑階級のレジャーであった旅行が大衆化する過程を見ておこう。

3. マス化するレジャー

イギリスでリゾートといえば、いつも水辺のことであった。それには2つの種類、すなわち内陸にある温泉や鉱泉場であるスパーと海岸の海水浴場とである (川島 : 194)。

18世紀のイギリスでは、ホリデーを楽しむことができたのは主として貴族やジェントリーのような富裕な有閑階級、特権階級に限られていた。ついで19世紀の工業化の時代にはいと、まず富を蓄えた商工業者、つまり新興中産階級が、その生活様式を模倣して、リゾートに現れるようになった。19世紀の中頃からまず熟練労働者層が、そして70年代以降になると、より多くの一般労働者層もしだいに工業化の恩恵に浴するようになり、彼らの自由な時間と実質賃金の伸びによって、国民のレジャー支出の総額が増大した（荒井：40）。

18世紀スパ・タウンを競い合うように訪問したのは、労働とは原則的に無縁の有閑階層、すなわち貴族やジェントリーであったり、あるいは彼らを庇護者（パトロン）、寄生宿主、顧客とする医師、牧師、文学者、芸術家、俳優、音楽家、賭博師、詐欺師などであった。彼らは十分に退屈な1年間のうち社交シーズンを過ごすためにロンドン、そして国中からスパ・タウンに集まってきた。いつからか、それに富裕な商人や東西インドをはじめとする植民地帰還者が加わった（川島：192-193）。

スパとして名を馳せたバースで1705年、訪問客への「もてなし（エンターテインメント）」全体を管理運営する役職マスター・オブ・セレモニーに就任したのがリチャード・ナッシュであった。彼は就任するとすぐ常設の小劇場を建設し、ダンスと賭博のための集会堂、食事やコンサート室を持つポンプ・ルームを建設した。かつての田舎町は「イギリスのフィレンツェ」と呼ばれるもっとも優雅でユニークな都会へと変貌した。バースの来訪者名簿はそのままイギリスの貴族、上層ジェントリーの名簿となった。ロンドンの流行が数日後にはバースにもたらされ、しばしばバースの流行がロンドンの流行となった。バースのシーズンである冬になると、貴族たちは気もそぞろに御者に馬車を準備させ飛ぶようにバースにやってきた。しかし、バースの黄昏は駆け足でやって来た（川島：200-205）。

バースの後、人気のリゾート地はブライトンであった。海水浴場のあるブライトンに1787年皇太子は離宮を建設し、これを拠点に皇太子とその取り巻き連が放蕩と歓楽の生活を繰り広げた。軍隊行進、競馬、懸賞つき拳闘、舞踏会、晩餐会、そしてダンディを自認した人びとのあらゆる類の奇抜な振る舞いが「虚栄の市」ブライトンの名物となった（川島：206）。

これに先立ってブライトンを有名にした3人の医師がいた。1人目は、健康のために海水浴、海水服用、新鮮な空気の摂取を大いに奨励した。2人目の医師は、ブライトンの出生率・死亡率をロンドンのそれよりも半分であることを示し、それがブライトンの土壌と気候が健康に適していると論じた。3人目の医師は、不幸にも病を得た人びとのために海水入浴施設の建設を目指して、海水浴と海水の飲用について薦めるパンフレットを出版した（川島：206-208）。健康都市ブライトンというイメージが強調されたのである。

そして、海水浴も成金やミドルクラスが模倣するところとなり、1820年代には往復していた豪華蒸気船で多くの人びとが移動し、旅行を楽しんでいた。ブライトンの夏の何ヶ月かはロンドンの商人たちに譲り渡され、秋口はといえば法律家たちに引き渡された。11月になって法律家たちが国会議事堂に呼び戻されると上流階級がブライトンへ移動をはじめ。この厳寒の季節に大衆が彼らの楽しみに加わることは間違ってもなかった。ブライトンは2シーズン制、すなわちミドルクラスでゴット返す夏と、上流階級が独占する冬とをもっていた（川島：209）。1841年ロンドン－ブライトン鉄道の開通がブライトン観光の大衆化に拍車をかけた。多数の遊覧列車が登場し、貴族・ジェントリーからミドルクラスへ、さらに労働者の上層へと観光の主体が拡大した（川島：211）。

大衆的な大陸への旅行は20世紀初頭のトーマス・クックの登場を待たねばならないが、イギリスでは労働者階級にまでレジャーの楽しみを享受する階層が拡大していた。これはヨーロッパ「世界経済」の中核、さらにヘゲモニー国家となったイギリス全体が有閑階級ならぬ、有閑国家あるいは有閑地域へと変貌していたことを示しているのではないか。次の3章ではヨーロッパ「世界経済」についてその動向を整理し、観光の位置づけについて考察の基礎とする。

3 章 背景としてのヨーロッパ「世界経済」

グランドツアーに始まる近代旅行の形成の背景として、やがて「世界システム」へと成長するヨーロッパ「世界経済」の発生、発展、変容とについて考察する。近代的ツアーが、人類史上いかなるところにも存在してきた冒険旅行から分離された観光旅行として確立するのは、この「世界経済」システムの中においてであったからである。

1. 長期の16世紀と収縮の17世紀

近代の世界システムは資本主義的な「世界経済」の形態をとっており、この「世界経済」は「長期の16世紀」にその起源をもっており、またそこには特有の生産物の再分配様式、つまり貢納による再分配様式とはまったく異質な社会システムへの移行があった。この時より、この資本主義的「世界経済」は、①地理的に地球全体を覆うようになり、②拡大と収縮の繰り返しがパターン化したこと、特定の経済的役割を割り当てられる地域が地理的に移動するようになったこと、すなわちヘゲモニーの確立と崩壊、中核・半辺境・辺境の立場におかれた各地の浮き沈みなど、③長期的な移行の過程、たとえば技術の進歩、工業化、プロレタリア化および、このシステムに対する政治的抵抗の構造など、今なお進行中の過程を経験することになった（Wallerstein, 1980=1993：6）。

1500～1750年まで「世界経済」の地理的領域はあまり変化がなかったが、それ以前の1450年もしくは1500年から1650年にいたる時期（長期の16世紀）と、1600～1750年の期

間（収縮の17世紀）とでは、資源、いろいろな経済的役割および富と貧困などの地理的分布に大きな違いが生じた。奢侈品ではなく、必需品の取引に関係したヨーロッパ貿易は東欧ロシアおよびトルコ領バルカンのあたりの境界線の内側で、あるいはまたキリスト教の地中海とイスラム教の地中海の境界線の内側で、もっぱら展開されていた（Wallerstein, 1980=1993：7）。

長期の16世紀はただインフレであっただけではない。革命的な構造転換の時代でもあった。新しい急進的な思想を取り入れようとする人びとの大集団が出現しもした。ヒューマニズムと宗教改革の思想は、彼らに感激させ、手に負えないところまで追いやる危険を孕んでいた。これに対して17世紀は沈静化の時代であり、頭を冷やす時期であったといえよう（Wallerstein, 1980=1993：35）。

ヘゲモニー状態とはごくまれな状態であり、資本主義的「世界経済」の歴史を通じてヘゲモニー国家となったのは、オランダ・イギリス・アメリカ合衆国の3カ国しかない。ヘゲモニーというのはたんに中核国家であるということだけではない。特定の中核国家の生産効率が極めて高くなり、その国の生産物がおおむね他の中核国家諸国においても競争力を持ちうるような状態であり、その結果世界市場を持つ自由な状態にしておくことで、その国が最も大きな利益を享受できるような状態のことである。オランダ（ネーデルラント連邦）がヘゲモニー国家であったのは1625年から1675年にかけてであった（Wallerstein, 1980=1993：45-46）。

17世紀の初め人口が最も稠密であったのは、第1に伝統的なヨーロッパの屋台骨にあたる地域、すなわちフランドルから北イタリアにかけての地域と「ヨーロッパ世界経済」の新たな中核地域、すなわちネーデルラント連邦西部、イギリス南東部、フランス北東部と西部であった。30年戦争、80年（オランダ独立）戦争、17世紀初頭の伝染病の流行は伝統的なヨーロッパの屋台骨地域とこれまで中程度の人口密度をもっていた北部・中部スペインの人口を劇的に減少させた（Wallerstein, 1980=1993：92）。

「世界経済」の下降期は、中核諸国あつては国民主義（重商主義）の上流階級内部での国制上の妥協方向をもたらし、その結果下層民衆は反乱が起こし難くなった。しかし東欧の諸国家は脆弱であったから、重商主義の戦術によって利益を得ることも、上流階級内部のいかなる妥協の保証人になることもできなかった。スペインでは1585年以降小麦価格が下がり、17世紀を通じて停滞したままであった。ワインや米、オイルなどの価格も同様であった。シチリアでは絹の輸出が低下したし、1640年からは小麦やワインの輸出も減少した（Wallerstein, 1980=1993：172）。17世紀は重商主義の世紀であったが、スペインとポルトガルとは、ついに重商主義国家にはなれなかった。この両国は半辺境国家、すなわち辺境における中核列強の利益を運ぶベルトコンヴェアアーの地位に転落したのである（Wallerstein, 1980=1993：182）。

1600年から1750年までの長期の収縮は、単に辺境諸地域をヨーロッパ世界システムに

組み込んだというだけではなかった。従来辺境のものとなっていたいくつかの活動、とくに穀物生産と牧畜業が辺境から中核に配置換えになり、その結果、東欧やスペイン領アメリカは地域市場に転換せざるをえなくなった。また、一部直接植民地支配を受け中核諸国では生産できないものだけを生産する新たな辺境地帯が作り出された。つまり、ブラジル北東部からメリーランドにいたる広義のカリブ海域における、砂糖、煙草それに金の3大生産物がそれである。中核国家－ネデルラント連邦、イギリス、フランスがそこからあがる経済的利益を分かちあった（Wallerstein, 1980=1993:189）。

2. 南ヨーロッパ諸国の半辺境化

南ヨーロッパは長期にわたってヨーロッパ経済の中心である地中海を支配する文字どおり「世界経済」の中核であったが、その中核が北へ、大西洋岸へ移動するにしたがって、半辺境化していった。

多くの国が試みはしたが、世界分業体制のなかでの自己の位置を決定的に変えることに成功した国はほんのわずかである。1国が成功すると、まさしくそのために他の国々にとっては機会や可能性が無くなったからである。17世紀には没落を余儀なくされた半辺境が多かった。スペイン・ポルトガル・伝統的ヨーロッパの屋台骨－フランドルから西および南ドイツを経て北イタリアにいたる地域－がそれである。他方では地位を向上させた他地域も少しはある。とくにスウェーデン、ブランデンブルク＝プロイセン、英領北米大陸の「北部」植民地－ニュー・イングランドと中部大西洋岸植民地がこれにあたる（Wallerstein, 1980=1993:222）。

スペインの没落は17世紀で最も際だった現象である。16世紀は原料輸出に限定された単なる辺境国家などではなかった。スペインの絹およびリネン生産の中心であったトレードは、1600年から1620年の20年間に事実上壊滅した。一方では、スペイン内部での両極分解の進行と地域紛争の激化がみられ、他方ではスペイン生き残りのために植民地という世襲財産を消費していくほかなかった（Wallerstein, 1980=1993:223-224）。17世紀スペインはせいぜい中核諸国とスペイン領植民地を結ぶ、どちらかといえば受け身のベルトコンヴェアーにすぎなかった。スペインは中核諸国から繊維製品とニューファウンランドの乾燥魚を輸入し、国内で消費したほか植民地にも転送した。ポルトガルも多かれ少なかれ同じような状況に直面した（Wallerstein, 1980=1993:226-227）。すなわちポルトガルはイギリスとの関係のなかで搾取され従属する関係を強制されることになっていったのである。

ポルトガルは18世紀に入るところには、事実上インド洋を放棄していた。ポルトガルは時々そこへ犯罪者を乗せた船を送るだけであった。ポルトガルの日々の関心事は広大なブラジルだけであって、その経済成長を監督し、搾取する対象としていた。ブラジルの主人、それは王国の商人たちであった。最初は王が主人であったが、後にリスボンとポ

ルトの大商人たちと、ブラジル諸都市、1763年以降首都となったりオ・デ・ジャネイロに住み着いた彼らの手先である商人たちが取って代わった。ブラジルが新しい長靴を履くたびに、すなわち砂糖、ついで金、ダイヤモンド、後にコーヒーを産するたびに、そこから利益を引き出し、なおいっそう安楽な暮らしを送ったのはポルトガル商人の上層部であった。富がテージョ川の河口を通して洪水のように押し寄せた。皮革、砂糖、カナード(粗糖)、鯨油、染料原料となる材料、木綿、煙草、砂金、ダイヤモンドの詰まった木箱。ポルトガル王はヨーロッパで最も富んだ君主であった。しかし、イギリスはポルトガルの怠惰な繁栄のなかにおいてその利益をのぼしていた。イギリス人はこの国を自分の思うようにつくりかえた。ポルトガル北部のブドウ園を発展させポルト酒の盛運を創出した。リスボンへの小麦と樽詰めの鱈の補給を引き受け、そこへ自国産の毛織物の箱を山のように持ち込んだ。金とダイヤモンドがそれらすべての支払いに充てられた。ブラジルの金はリスボンをかすめるように通り過ぎて北へその道をたどり続けるのであった。ポルトガルはイギリスの植民地のようであった (Braudel, 1979=1988: 258-260)。

半辺境化した南ヨーロッパ諸国には中核である北方からやってくる旅行者が増加することになった。このことについて次に述べよう。

3. ヴェネツィアの観光都市化

半辺境地域へと没落した南ヨーロッパは「世界経済」の中心地であるイギリスやオランダ、フランスなどからの旅行目的地へと変貌していった。この点に関してロフガンは、ブローデルの歴史研究によりながら端的に述べている。

地中海における観光産業の形成にはいくつかの位相が含まれている。ブローデルの歴史研究によれば、17-18世紀の間に地中海世界の緩やかな衰退の期間は、ヨーロッパの経済的、文化的な焦点が西北ヨーロッパおよび大西洋岸に移動した時期であった。次の世紀の間には、この不均等はさらに激しさを増し、地中海世界はヨーロッパの辺境、僻地地域となり、その主要な輸出は移民であった。他方で新たな輸入は旅行者となり、彼らは北方ヨーロッパのエリートで、古典文化を学び求める目的地として南ヨーロッパをめざしたのである。地中海は歴史の影に隠れ、古典的な遺物やルネサンス、初期の荘厳な時代へと逆戻りするタイム・トラベルの目的地となったのである (Löfgren: 157)。

南ヨーロッパのイタリアも衰退、辺境化を免れてはいなかった。ここではベネツィアを観光都市化した典型的な事例としてみていこう。

18世紀グランドツアーの古典的時代に、イギリス貴族を含む北部ヨーロッパ諸国からやってくるエリートの数は増加していた。ツアーは通常パリへの旅やイタリアの主要な諸都市、例えばローマ、ヴェネツィア、フィレンツェ、ナポリへの訪問が含まれており、さらに他の旅行の基本的なプログラムが付け加えられた。イタリアへの旅行は注目され

る一方で、スペインやギリシャを訪れる旅行者はわずかであった。旅行のためのルート・コンディションが劣悪であったからである。(Löfgren: 160)

ヴェネツィア共和国。この国ほど華やかな斜陽の光のなかに滅びて行った国があったろうか。海の女王と讃えられ、アルプスの北の諸大国からも恐れられるほどの軍勢力を有したヴェネツィアも今は衰えて見る影もない。東方航路を独占し、世界の富を集め、ヴェニス商人の名を高らしめた経済力もすでに二流の地位に転落して久しい。16世紀とともにヴェネツィアが衰退に向かったのは事実であった。16世紀が始まったとき、ヴェネツィアはもはや女王のようにヨーロッパ中心に位置していたわけではない。1550年ないし1560年頃までその中心となったのはアントワープであった。次に1579年から1621年まで商人＝銀行家のジェノヴァが中心としてふたたび浮上し、さらにその後今度はアムステルダムが取って代わった (Braudel, 1984=1990: 87)。しかし、ヴェネツィアの18世紀には否定しがたい活力に満ちた啓蒙の世紀でもあった。退廃していたかも知れないが、しかしたんに生き生きしていたという以上の活力に溢れていた。(Braudel, 1984=1990: 93)。ヴェネツィアの幅広い庶民の働きにこそ優先的地位を認められるべきである。労働人口は16世紀の水準を保存続けていた。物価が異常に高い町、観光客相手の、豪奢な町の顧客が想像するような職だけではなく、この町の庶民の仕事を列挙すれば数頁を費やしても足りない (Braudel, 1984=1990: 98)。ヴェネツィアは依然として商人を持ち、実業家と資本に溢れていた。浮かれ騒ぐ18世紀のヴェネツィアを語る前に、社会の上層から下層まで、その経済は健全だったことは忘れてはならない。1669年から1798年にいたる1世紀ちょっとの間、ヴェネツィアではそれぞれ約40の館と教会、1ダースの劇場、半ダースの病院、1ダースの学校が建てられ、あるいは建て直された。もはや政治の中心でも、文化の中心でもなくなったヴェネツィアはそれでもなお世界で最も魅力に満ちた都市であり続けた。そのうえで、18世紀ヴェネツィアは「歓楽の都市」であった (藤沢: 216)。そして、ヴェネツィアがさまざまな祭の光景をヨーロッパに提供するとすれば、この町にはそれを組織するだけの力が備わっているからなのである (Braudel, 1984=1990: 107-108)。

18世紀のヴェネツィア警察体制は、政治弾圧の手綱を締めれば締めるほど、風俗の取り締まりを緩めた。快楽が抑圧を代償し、体制の存続を助けるからである。このことがこの町を「歓楽の首都」たらしめた。「この町ではすべてがショーであり、娯楽であり、官能でもある。ここでは年に6ヶ月間も狂気じみた祭騒ぎが続く」といわれた。18世紀のヴェネツィアではカーニバルが半年にわたったのは事実だ。10月の第1日曜日に始まり、途中で中断されることはされるが、その間にクリスマスと新年が盛大に祝われる。四旬節になると信仰のためというよりもむしろ疲労のためにカーニバルを中休みするが、そこで元気を取り戻してまた熱狂的なお祭り騒ぎに没頭する。聖者と記念日が総動員され、共和国の暦は祝祭日で埋まった。祝祭は窮屈な束縛から万人を解放する。タバルロとい

う足先までの長い黒いマントにすっぽり身を包み、バウッタという簡単な仮面を顔に付ければ階級差も性差もなくなる。全員匿名の祝祭享楽に満ちたものとなった。名家のお屋敷にも仮面を付けていれば平民が入り込めたし、修道女もバウッタをつければ外出でき、貴婦人も同様の装束で酒場や賭博場へ出入りできた。これほど楽しく遊べる町は、この時代のヨーロッパでは他にはパリしかなかった。それにパリよりもずっと安全であったといわれる（藤沢：265-266）。

カーニヴァルの仮面のヴェネツィア、豪華な行列の、水上槍試合の、闘牛の、演劇の、音楽の、色好みの、際限ない賭の、印刷術の、新聞の、文学カフェの、はつらつとした絵画のヴェネツィアが、18世紀のあらゆるヴェネツィアのなかで最も重要なものだ。

ありとあらゆる家で、船で、ゴンドラで歌うヴェネツィア、それは才能や天才や欲求や生への愛が、軽薄なもの、あるいは軽薄さを自称するもの、笑い、奇想、悪ふざけ等々の自己表現を選ぶヴェネツィア。共和国によって認可された仮面は国に守られてもいた。仮面を着けてさえいれば、サロンだろうが、料理場だろうが、修道院だろうが、舞踏会でも館でも、怪しげな賭博場のあるリドット（小劇場）でもどこでも入っていける。仮面はたんなる遊びや装飾の変化ではなく、社会的変化であり、社会的転覆なのだ。町中の人びとが街路に繰り出し、ゴンドラはいうにおよばず、広場という広場、小路という小路が笑いと歌と踊りとロンドと音楽で充たされる。芝居でもオペラでも毎年新作を上演するのがしきたりであったし、音楽院では外国の大家たちが教え、教会でもコンサートが開かれ、私的な上演もあれば公開のオーケストラ演奏もあり、有名な修道院では修道女たちが週に2度すばらしいコンサートを開いた。それらすべてがヨーロッパ中の最も優れた音楽家にとっても音楽好きにとっても、またとない出会いの場であった（Braudel, 1984=1990：108-111）。

ヴェネツィアの住民が10万以上、それに外国人も10万人以上いて、この町は膨れ上がっていた（Braudel, 1984=1990：97）。洗練された楽しみを求めてイタリアからも外国からも集まってくる無数の観光客を楽しませた。それにヴェネツィアは並はずれて多い観光客のために、絶えず輪をかけて祭を盛り上げ、出し物を多彩にし、プログラムを変える必要があると思っている。画家たち、音楽家たちの仕事がせかされたのはそのためであった。詩人は喜劇の筆をおく余裕がなかった（Braudel, 1984=1990：114）。画家たちも一息入れるひまもなかった。ヴェネツィア人にせよ外国人にせよ小品を売りつけるのがいとも容易だったからである（Braudel, 1984=1990：116-117）。

16世紀から衰退の始まりを画したように、啓蒙の世紀は新たな飛躍の兆しを示したといえよう。祝祭や数々の新作の初演がその飛躍の表現ともなる。ヴェネツィアは豪奢きわまりない観光旅行を発見した。それはもはや家庭教師や思慮深い同行者をともなったヨーロッパ中の貴族の子弟の遠出などではなく、生きたい、笑いたい、そして一瞬のうちにすべてを忘れたいと願う連中が大量に押しかけるようになったのだ。ヴェネツィア

はその種の訪問客で溢れ、人口はおおよそ2倍に膨れ上がった (Braudel, 1984=1990: 120-121)。

お祭り騒ぎの都市のあり方は市や大市の特徴とも考えられる。ブローデルはヨーロッパ各地の市、大市について整理して、次のような記述している。

大市、それは雑音、耳を聳する騒音、にぎやかな叫び声、民衆の浮かれ騒ぎ、裏返しの世界、混乱、時には騒動である。フィレンツェに近いプラートでは毎年9月になるとトスカナのすべての都市のラッパ隊が市中の街路や広場で、我勝ちに吹き鳴らすためにやってくる。市街は今や、人を楽しませる芸を身につけたあらゆる種類の人びと、霊妙な効能を持つ薬・売薬・万能膏薬などの売り子、占い師、軽業師、手品使い、綱渡り芸人、抜歯師、遍歴の楽士と歌にあつという間に占領される。旅館は人でふくれてしまう。ヴェネツィアにおいて、復活祭の40日後の昇天祭 (ラ・センサ) の大市は2週間続くが、祭礼と演劇的表現の場である。サン・マルコ広場に外国商人の仮店舗が設営される。男も女も仮面を着けてやってくる。そして総督はヴェネツィアの外港リドの中心部サン・ニコロ正面の沖で、海との結婚の誓いをする。しかし、ラ・センサの大市には毎年なんと10万人以上の外国人が娯楽を求め、この驚くべき都市のスペクタクルを楽しむために押しかけてくるのである (Braudel, 1979=1988: 91-93)。

いずれにしても、経済の中心から辺境化した南ヨーロッパの各都市は、祝祭都市に変貌し北部ヨーロッパの「世界経済」の中核からの旅行目的地の地位を得たのであった。

4. ゲーテのベネツィア体験

1789年ゲーテはイタリアへの旅行に出て、9月28日～10月14日までベネツィアに滞在した (Goethe)。この間にゲーテがどのような体験をしたか整理する。体験は (1) 市内、市民生活見物、(2) 歴史的遺産、美術品見学、(3) 演劇、音楽鑑賞に分けることができる。

(1) 市内、市民生活見物

9月28日：夕刻、ヴェネツィア到着。「イギリスの女王」という旅館に気持ちのいい宿を取っている。サン・マルコ広場から程等からぬ所にある。

9月29日：ミカエル祭の夜。ヴェネツィアについては、すでにいろいろ伝えられており、書物にもなっているから詳しい記述を試みようとは思わない。そこで私になによりもまず迫り来ったものは、またしても民衆である。今日はミカエル祭であるから、得もいわれず活気の横溢した眺めである。今日は着飾って黒いヴェールをつけた婦人が、お祭りのある首天使の寺院へ行こうとして、たくさん群をなして渡してもらっているの、見事な風情であった。

9月30日：夕方私はふたたび案内者もなしに、市のもっとも遠い地区へ迷い込んでいっ

た。夜、私はヴェネチアの地区の地図を買い求めたので、それを持ってマルコの塔に昇ったが、そこからは眼前に類ない眺望が展開していた。

10月1日：私は出かけて種々の点について市中を視察した。ちょうど日曜日だったので、まず市街の非常な不潔が眼についた。

10月3日：地図を手にして分かりにくい迷路を通り抜けて、私はメンディカンティの寺院まで辿りついた。ここには現在もっともいい音楽学校がある。婦人たちが格子の中で声楽を奏していたが、聴衆は会堂一杯で、音楽は非常に美しく、声もまたすぐれていた。

10月4日：終日、広場や岸辺で、またゴンドラや宮殿の中で、買い手と売り手、乞食、船乗り、隣の女、弁護士とその相手、そういったあらゆる人間が生活し、活動し、真剣になり、語りかつ誓い、叫んでは売りはたき、歌ったり罵ったり、呪ったり騒いだりしている。それが晩になるとかれらは芝居を見物にでかけ、自分らの昼の生活の人工的に纏められ、面白く粉飾され、お伽噺を織り込まれ、仮面によって現実の姿から遠ざけられはするが、風習によって近づけられるのを見聞する。彼らは子どものようにそれを喜んで、またもや叫んだり、拍手したり、大騒ぎをする。夜から夜まで、否夜中から夜中まで一切が常に同一であった。

私の窓の下の運河で、人びとがなにやら大騒ぎをやっている。もう真夜中も過ぎているのに。彼らは良いことだろうと悪いことだろうと、いつも一緒になって騒ぎ立てるのだ。

路傍演説というものを聞いてみた。

今日の聖フランテスコの祭日には、彼を祀る寺院アレ・ヴィニャに参詣した。

10月5日：今朝私は海軍工廠へ行ってみた。私は職工の後について行って、いろいろ珍しいものを見物し、さらに84門の砲を備えた、骨組みのすでにできあがった船にも昇ってみた。

10月7日：今朝私は、トルコ人に対する戦勝を記念するために例年この日に聖ジュステイナ寺院で行われ、総督もそれを出席することになっている大供養を見に行った。

10月8日：私は今朝、守護神と一緒に船でリドーへ渡った。リドーというのは潟を仕切って、海から隔てている地峡である。

10月9日：朝から夜にいたるまで、貴重な1日であった。私は、キオッツアの方へ、パレストリナまで船で行った。今夕私は聖マルコの塔へ昇ってみた。

(2) 歴史的遺産、美術品見学

- 2日：私はカリタ修道院へ急いだ。多くの僧侶には住居となり多くの旅人にはあたたかい宿となる1字の修道院をば、古代の私邸の形式を模して建てたのであった。
- 3日：イル・レデントーレ寺院はパラディオの手になった美しく偉大な建築であり、その正面は聖ジョルジュより遙かに賞賛すべきものである。
- 6日：パラディオの建てた建物。
- 8日：パオロ・ヴェロネーゼの名画を見るために、私はビザニ・モレッタ宮を訪れた。ファルゼッティ家には最良の古代美術品の模造の貴重な収集がある。

(3) 演劇、音楽鑑賞

- 1日：晩はモーゼのオペラを見に行った。あまり感心もできなかった。
- 2日：前夜のオペラに反して、今日見たひとつの喜劇はもっと面白かった。侯爵の宮殿において、私は訴訟事件が公開で審議されるのを傍聴したのである。
- 3日：私は聖ルカ劇場の喜劇を見に行ったが、大変面白かった。豊かな天分と気迫と度胸とを持って演出された仮面即興劇を見物したのである。
- 5日：夜、私は悲劇を見て笑いながら帰ってきた。
- 6日：晩私は聖クリズストモ劇場で、クレビヨンの「エレクトラ」を見た。この作の無趣味なことと恐ろしく退屈であったこととは、お話にもならない。ただし、俳優は達者で、場面によっては観衆を喜ばすことを心得ていた。
- 7日：タッソーやアリオストの歌を独特の節回しで歌うという船乗りの有名な歌を、今晚聞くことに約束しておいた。これはあらかじめ注文しておかなければならないのだ。月光を浴びながら私はゴンドラに乗った。一人の歌い手は前方に、他の一人は後ろに乗っている。二人は歌い始め、代わる代わる1句ずつ歌ってゆく。
- 10日：ようやくこれで私も喜劇を見たと言言することができることとなった。聖ルカ劇場で、「キオッツアの喧嘩口論」とでも訳さるべきものである。
- 11日：昨日聖ルカ劇場で新作劇「イタリアにおけるイギリス気風」が演ぜられた。イタリアにはたくさんのイギリス人が生活しているので、彼らの風習が眼につくのは当然のことである。

ゲーテのヴェネツィア滞在は現代の観光者同様、「案内書」や地図を手に町中を歩き、人びとの生活の様子を眺めたり、歴史的な遺産を見て回ったりしていた。そして、連日オペラや演劇鑑賞をしていたことが注目される。

4章 「世界経済」への編入とアジア諸国の観光地化

ヨーロッパ「世界経済」の中心が北部へ移動し、南ヨーロッパ諸国の辺境化、観光地

化への変化が明らかになった17～18世紀において、アジア諸国地域はまだ「世界経済」に組み込まれてはおらず、ゆえにヨーロッパ中核からの観光目的地でもなかった。18世紀後半になってアジア諸国はヨーロッパ「世界経済」へ組み込まれ、観光目的地化していくことになった。本章では、この変化に注目することにする。

1. 「世界経済」に編入されるアジア

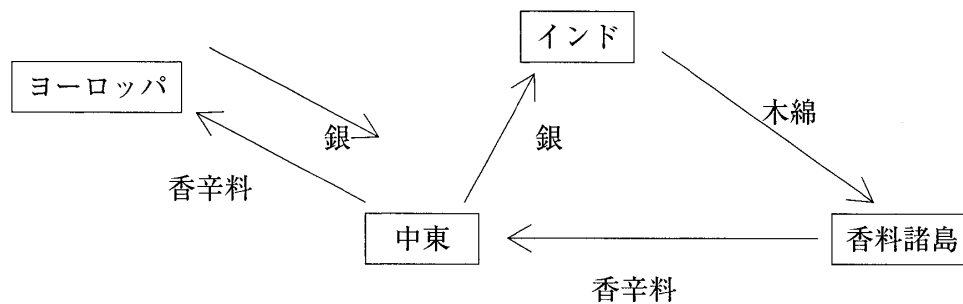
17世紀末アジアの対ヨーロッパ貿易では、胡椒と香料から他の奢侈品、例えばインド産織物、中国、ベンガル、ペルシャの絹、中国趣味の装飾品（漆器、陶器など）、およびこれも初めのうちは贅沢品であった茶とコーヒーなどに、次第に移行しはじめた。もっともこの貿易は発展していたとはいえ、なおそれだけではインド洋地域を辺境として「世界経済」に取り込むことにはならなかった。

ヨーロッパ人のアジア貿易への関心が深まる一方ではあったものの、アジアはなお外縁部に止まっていた。1600年から1750年までの間に中核諸国はしだいに世界の広大な地域の植民地化ないし半植民地主義勢力へと変わっていった。真の意味での辺境化、つまり「世界経済」への組み込みが始まったのは18世紀中頃の上昇期以降のことであった（wallerstein,1980=1993:327）。

ところで、「世界経済」の辺境地域とその外側にある世界との違いとは、いかなるものであろうか。「世界経済」の辺境とは基本的に低位の商品、つまり労働報酬の低い商品を生産するが、重要な日用消費財を生産するという意味では全体としての分業体制の大切な一環をなしている地域のことである。他方「世界経済」の外の世界というのは別の世界システムに属するうえに、「世界経済」との間に貿易関係はあっても、主として奢侈品の交易、つまりしばしば「豊かな貿易」と呼ばれる交易しか持たないような地域である（Wallerstein,1974=1981:213）。インド洋貿易圏はヨーロッパの1強国ポルトガルによって完全に支配されたにもかかわらず、「ヨーロッパ世界経済」の一部を構成していたとはいえないのはなぜか。ポルトガルがインド洋で、ついでシナ海で電光石火のごとき進出を遂げた主な原因が、「海上貿易の真空状態」にあったことは疑問の余地はない。この真空状態は経済的なものではなく、政治的なものであった。ポルトガル人がこの地域での貿易を生み出したものではないという事実がある。彼らは、当時のインド洋ではイスラム人、シナ海では倭寇の手にあった既存の商業網を篡奪したにすぎない（Wallerstein,1974=1981:240-241）。ヨーロッパ人が東インドにやってきた目的のひとつは胡椒・香辛料の獲得であった。彼らが東インドに着いたときにはすでに図表1のような三角貿易の一環として取り引きされていた（川勝:37）。ポルトガル人はこの三角貿易の存在を知り、その中継貿易が莫大な利益を生むことを発見、これを武力で奪取した。16世紀前半、三角貿易の西方の拠点が中東→ヴェニス経路からリスボン→アントワープ経由へと移り、17世紀には中継貿易の覇権はオランダとイギリスの手に移り、

拠点もアムステルダム、ロンドンへと北上した。だが、ヨーロッパの銀、インドの綿、香料諸島の胡椒・香辛料よりなる三角貿易の基本構造そのものは17世紀になっても変わらなかった（川勝：39－39）。

図表1 インド洋世界の三角貿易



出典）川勝平太『日本文明と近代西洋－＜鎖国＞再考』日本放送協会，1991年

この三角貿易が成立していた理由をみると、まず金銀がインドへもたらされた背景には2つの事情があった。すなわち、ひとつはヨーロッパの物産でインドが大量に欲したものが他になかったこと、もうひとつはインドでは金銀がルピー銀貨、パゴダ金貨の材料として用いられ、また装飾品としての用途も莫大であったからである。またインド木綿は太古よりインドの独占的物産であり、香料諸島（モルッカ、ジャワ、スマトラ、ボルネオ）の人びとの衣料として大量の需要があった。ヨーロッパでは人びとの食料用、家畜の越冬に必要な飼料に事欠いたために、秋に家畜を屠殺されていたが、胡椒・香辛料はその肉の保存や長期間の保存でまなくなった肉の味付けに用いられ、生活には不可欠であった（川勝：39－41）。アジアからリスボンへの最大の輸入品は胡椒ないしはそれを含む香辛料であった。15世紀末すでにヨーロッパはおそらくアジアの胡椒生産の4分の1を消費していたし、16世紀のうちにヨーロッパの需要増加に対応して、アジアでの生産量が2倍になった。逆にアジアがヨーロッパから得たものは地金つまり金と銀であった。ヨーロッパがアジアの商品を希求する限り支払ざるを得ない代価でもあったのであり、このことは当時のアジアがヨーロッパの「世界経済」の外にあったことを示す証拠でもあった（Wallerstein, 1974 = 1981, II 241）。

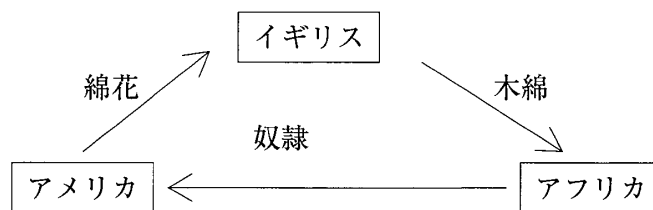
ポルトガル人はアジアに来てそこに繁栄している「世界経済」を見出したのであり、彼らはそれをいささか改良し、その努力への報酬としていくらかの商品を持ち帰ったのであり、アジアに実在した「世界経済」の社会組織にも、その上部構造として政治機構にもほとんど手を着けることはなかった。この時代にアジアがヨーロッパに与えたのはほとんど奢侈品であった。奢侈品といえども重要な意味があり、軽視するわけにはいか

ないが、食料つまり穀物、家畜、魚類、砂糖ほどの意味はなかった（Wallerstein, 1974 = 1981, II 243-244）。新世界への植民のほう報酬が大きかったこと、アジアへの植民地ははるかに困難だったという2つの事情が重なって、16世紀には新世界は「ヨーロッパ世界経済」の辺境になったにもかかわらず、アジアは依然としてその外部世界に止まっていた（Wallerstein, 1974 = 1981, II 248）。

アジア諸国を「世界経済」に編入し、外部世界から辺境へと変化させたにはいかなる事情からであったかを川勝の論文から考えてみよう。

イギリス東インド会社の主な目的は、自国製の毛織物を売ることと、胡椒・香辛料の獲得であった。しかし常夏の香料諸島やインドでは毛織物は不適當であるばかりでなく、それ以上に色彩豊かで安価な木綿をインドが持っていたのである。また、胡椒獲得にはポルトガルと対抗しなければならなかったが、1588年イスパニア・ポルトガル連合の無敵艦隊を破ったことでイギリス・オランダの優位が決定的となった。当初三角貿易の交換手段でしかなかったインド木綿を、イギリスに持ち帰ると、これが人気を博し17世紀までに大流行となった。さらにイギリスのみならず、オランダ、ドイツ、イタリア、スペイン、フランスにいたるまでヨーロッパ全土に浸透し、普及した。また木綿市場はヨーロッパ、アフリカ、アメリカと大西洋を取り囲む各地域に形成された。イギリス綿工業の課題はインド木綿に匹敵する良質、安価な木綿を製造することであった。イギリス産業革命の主軸＝木綿工業は、インド木綿の流入という外圧に対抗する輸入代替工業として勃興してくるのである。その結果18世紀末から19世紀はじめにかけて環大西洋木綿市場においてイギリス木綿はインド木綿を凌駕した。イギリスははじめてインド洋文明圏に対して生産力で優位に立ったのである（川勝：42-61）。こうして新たな大西洋世界の三角貿易が形成された（図表2）。

図表2 大西洋世界の三角貿易



出典) 同上書より作成

こうした動向のなかで、アジア諸地域はヨーロッパ「世界経済」に組み込まれ、新たな辺境を構成することになった。経済的な分業の役割を果たすばかりでなく、ヨーロッパからの旅行目的地としての位置づけをも与えられることになった。次にアジア各地が国際観光の目的地として必要となるホテルの開業の歴史について整理する。

2. アジア諸国の国際観光ホテルの創業

18世紀終盤以降アジア諸地域はヨーロッパ列強の植民地と化し、19世紀後半になると国際観光の旅行目的地となり、ホテルの創業が相次いだ。本節ではアジア諸国におけるホテル創業と日本における創業について若干の資料を提供する。

(1) アジア諸国のホテル創業

アジア各地のいくつかのホテルについて創業年を示したのが図表3である。

図表3 アジア諸国のホテル創業年

創業年	ホテル名	都市／国
1864	ゴール・フェイス・ホテル	コロンボ, セイロン
1865	ニュー・オリエンタル・ホテル	ゴール, セイロン
1874	ミリタリー・ゲスト・ハウス	ハノイ, ベトナム
1875	グランド・オリエント・ホテル	コロンボ, セイロン
1880	コンティネンタル・ホテル	サイゴン, ベトナム
1885	ステーション・ホテル	クアラルンプール, マレーシア
1887	ラッフルズ・ホテル	シンガポール
1900	グッド・ウッド・パーク・ホテル	シンガポール
1912	マニラ・ホテル	マニラ, フィリピン
1928	ペニンシュラ・ホテル	香港

これらのホテルについて若干開業の背景についてみておこう。

ゴール・フェイス・ホテル (Galle Face Hotel) 1864年創業, コロンボ, セイロン

ビクトリア様式の建物であるこのホテルは、開業した直後から「スエズ以東で最もエキゾチックなホテルのひとつ」と賞賛された。インド洋に面した部屋をリーズナブルな価格で提供し、コロニアルなマナーとサービスで、19～20世紀を通じてセイロン島におけるイギリス的植民地生活様式の中心となった。

ニュー・オリエンタル・ホテル (New Oriental Hotel) 1865年開業, ゴール, セイロン

スリランカはイギリス植民地に組み込まれる以前ポルトガル、オランダがゴールを根拠地として支配していたが、そのころホテルはなかった。このホテルの建物は当初ポルトガル時代の軍施設と建築されたものであった。イギリス時代になっても引き続きイギリス軍施設として使用されていたが、1865年ホテルに転用され、開業した。

グランド・オリエンタル・ホテル (Gurand Oriental Hotel) 1875創業

コロンボ, スリランカ

1837年イギリスはコロンボのフォート地区に兵舎を建設し、セイロン支配の基礎を築く力とした。その軍がフォートを去った後1875年これを改造して、「申し分のない設備を備えた、ロンドンの有名ホテルと同様のサービスを提供する、豪華なホテル」として開業した。

コンティネンタル・ホテル (Continental Hotel) 1880年創業 サイゴン, ベトナム

コンチネンタル・ホテル創業の計画はピエール・カザウによって実現された。

ステーション・ホテル・クアラルンプール (The Heritage Station Hotel Kuala Lumpur)

1885年創業, クアラルンプール, マレーシア

かつてのイギリス駐在公邸を改修して国賓の接待にも使われている超高級ホテル、カルコサ・スリ・ネガラを除いては、クアラルンプールで唯一の「コロニアル」時代を今もしのばせるホテルである。ステーション・ホテルの歴史はそのままマレー鉄道の歴史でもある。マレー半島に初めて鉄道が施設された1885年以来、植民地産品であるスズやゴムの輸送の担い手としての鉄道は半島内陸部と港を結ぶ植民地経済の根幹として、さらには北はタイのバンコクから南はシンガポールまでをつなぐ国際鉄道として次々にその路線を拡大していった。

グッド・ウッド・パーク・ホテル (Goodwood Park Hotel) 1900年創業, シンガポール

ラッフルズと並んで百年の歴史を持つ。19世紀中頃遅ればせながらドイツはシンガポールにイギリス人に次いで多いドイツ人居住者をうんだ。ドイツ人コミュニティの社交クラブ「テュートニア・クラブ」は1900年スコット・ロードに面した広大な丘を買取り、クラブハウスを作った。これが現在のグッド・ウッド・パーク・ホテルのシンボルであるタワー・セクションである。

マニラ・ホテル (Manila Hotel) 1907年創業 マニラ, フィリピン

19世紀末スペインからの独立をめざした蜂起、それと時を同じくする米西戦争の結果、フィリピンはアメリカの植民地となった。20世紀初頭来訪するアメリカ人ビジネスマンの数も増え、また植民地統治高官のための施設が必要となり、植民地政府主導でフィリピンを代表するホテルの建設が始まった。こうして1907年マニラ・ホテルが完成した。

アジア社会はヨーロッパ「世界経済」システムに組み込まれると、すなわち外部世界の状態を脱してから辺境として分業体制に組み込まれるとヨーロッパ人の観光旅行の目的地ともなっていた。その対応としてホテルの開業が進んだといえよう。アジア諸国における初期のホテルは、植民地における迎賓館的な役割や植民者たちの社交場的な機能をも兼ね備えたものとして植民者たちの手で開かれていった。

(2) 日本における初期のホテル

つぎに日本における洋風ホテルの創業についてみておこう。19世紀から20世紀にかけて設立された主なホテルを示したのが図表4である。

図表4 日本における初期のホテル

創業年	ホテル名	所在都市
1860 (万延元)	横浜ホテル	横浜
1863 (文久3)	横浜クラブ	横浜
1868 (慶応4)	築地ホテル	東京
1868 (明治元)	グローブ・ホテル	神戸
1869 (明治2)	自由亭ホテル	大阪
1870 (明治3)	オリエンタル・ホテル	神戸
1873 (明治6)	金谷ホテル	日光
1873 (明治6)	グランド・ホテル	横浜
1890 (明治23)	常磐ホテル	京都
1890 (明治23)	帝国ホテル	東京
1894 (明治27)	万平ホテル	軽井沢
1903 (明治37)	有明ホテル	雲仙
1907 (明治41)	富士屋ホテル	箱根
1909 (明治43)	奈良ホテル	奈良

これらのうちいくつかのホテルの創業当時のいきさつについてそれぞれのホームページの紹介などをみると興味深い。いくつかを紹介しておこう。

横浜クラブ 1863 (文久3) 年創業 横浜

この年は横浜居留地が建設ラッシュを迎えたころにあたる。横浜は半農半漁の村で、わずか100戸足らずの寒村にすぎなかったが、1854 (嘉永7) 年にペリー提督との間で結ばれた日米和親条約締結の場所となり、のちには日米通商条約で1859 (安政6) 年に開港され居留地となり、続々と外国人が入り込み、一躍ブームタウンの様相を呈してい

た。そんななかで創られたのが彼ら外国人たちのための横浜クラブであった(富田:16)。

オリエンタル・ホテル 1870(明治3)年創業 京都

神戸居留地随一のホテルであった。神戸居留地は兵庫県初代知事伊藤博文とイギリス人技師の間で協議され都市計画が策定された都市で、ホテルはその中ほどに開業した。アジアの3軒のホテル(ペナン島のオリエンタル・ホテル、シンガポールのラッフルズ・ホテル、香港のビクトリア・ホテル)をはるかに凌駕したといわれた(富田:30-31)。

グランド・ホテル 1873(明治6)年創業 横浜

海岸通20番、現在のマリントワーの隣接地にあたる場所で産声を上げた。建物は木造2階建て、1階には食堂や厨房、読書室、2階に30室ほどの客室があって、居留地横浜を代表する内容を備えていた。W.H.スミスが総支配人となって経営にあたった。スミスは横浜クラブを設立した人物で、イギリス近衛兵隊軽騎兵隊の中尉であった。グランドホテルはすべてのヨーロッパ人のたまり場になった(富田:18-19)。

日光金谷ホテル 1873(明治6)年創業 日光

幕末の頃、東照宮の楽職に金谷善一郎という人物がいて、笙の役を務めていました。明治の声を聞いて3年目のある日、善一郎は宿探しで困っていた外国人を見つけます。当時旅館の経営者たちは外国人に対して警戒心を抱いておりましたが、善一郎は全くの親切心でその外国人を自宅に泊めました。ところがその行為によって善一郎は東照宮から破門されてしまいました。その外国人とはヘボン式ローマ字で有名なヘボン博士だったのです。彼は横浜に住み、外国人のための和英辞典を発行するなど確たる地位を築いていました。彼は、善一郎に言います。「今後、日光を訪れる外国人が増えますよ。事に夏は暑い東京や横浜から逃げてくるでしょう。来年は友人たちを連れてくるから、できるだけ部屋を用意して家計の助けにしたらよいでしょう」。こうして善一郎は日光金谷ホテルの前進である金谷カッテージ・インを開業します。明治6(1873)年のことです。そして20年後、洋室30室を備えた日光金谷ホテルを開業するのです。(日光金谷ホテルホームページ)

富士屋ホテル 1878(明治11)年創業 箱根

鎖国から開国へと時代が大きく動くなかで、外国人が宮ノ下の奈良屋などの旅館に宿泊し、日本の温泉に親しむようになりました。明治にはいると、外国人向けのリゾートとして箱根に新しい可能性を見出した人物が登場します。山口仙之助です。彼は米国に渡り、その後慶應義塾に入って福沢諭吉に師事し、やがて宮ノ下の藤屋旅館を買収、それを改修して富士屋ホテルとします。明治11(1878)年のことです。数年後、宮ノ下は

大火に見舞われ、ホテルも全焼してしまいます。仙之助は養父から援助を受け再興に務め、大火の翌年に営業再開を果たします。仙之助はその後数回にわたってホテルを増築すると、明治24（1891）年にはいよいよ大きな和風建築を完成させました。今日も堂々たる建築美を見せている本館の誕生です。

軽井沢万平ホテル 1894（明治27）年創業 軽井沢

江戸時代軽井沢は宿場町として繁栄していましたが、明治時代にはいと、その役割が失われ、寂れてしまいました。そんなとき明治19（1886）年に軽井沢に現れたのが宣教師アレキサンダー・ショーと英語教師ジェームズ・ディクソンでした。彼らはたまたま休業状態の旅籠・亀屋を訪れて「一夏の間、借りたい」と申し出たのです。亀屋の主人佐藤万平はこれを好機ととらえ、外国人の生活習慣やもてなす技術を学ぶことにしました。そして明治27（1894）年に一部を洋風に改装して亀屋ホテルと名乗り、翌年万平ホテルと改めます。したがって万平ホテルでは正式創業年を明治27年としています。当初は萬平ホテルと表記していました。（軽井沢萬平ホテルホームページ）

有明ホテル 1903（明治37）年創業 雲仙

有明（ゆうめい）ホテルは明治37（1903）年長崎の港に入港する外国人（主にイギリス、ロシア、フランス）の避暑地のホテルとして誕生いたしました。当時は「ありあけ」と呼んでおりましたが、外国人のお客様には母音の発音がしにくいということで、「ゆうめい」と名付けられて今日に至っております。当時は、一夏を雲仙で過ごす長期滞在のお客様同士で親しくゴルフや散策をしていたようです。（有明ホテルホームページ）

奈良ホテル 1909（明治42）年創業 奈良

古都奈良においてホテル建設の気運が高まったのは、日露戦争が勝利に帰した明治38（1905）年のことでした。外国人観光客の増加が見込まれているのに、奈良にはその受け皿がなかったからです。計画が進むうちに単なる外国人の宿泊施設から関西の迎賓館的なホテルにしようという考えが出てきました。当時の新聞は荒池を中央に、左に奈良ホテル、右に興福寺の五重の塔を見る光景を「優雅な一幅の絵巻物を繰り広げたようで、うつくしいことこの上ない」と報じました。ホテルは明治42（1909）年10月17日に開業しましたが、その日開業を祝して蒸気機関車が警笛を鳴らし、その音が古都にこだましたといいます。（奈良ホテルホームページ）

このようにみえてくると、日本における各地の初期ホテルは開国前後から増加する外国人居留者や旅行者への対応として日本人自らがホテル建設、操業へ動いていることが分かる。他の植民地諸地域におけるホテル創業とは異なった経過を示しているのであるが、

このことからホテル創業が「世界経済」システム内における位置付けによって影響されていることが理解される。

5 章 アジア国際観光研究の視点

1. まなざし論アプローチとオリエンタリズム

「アジア諸国の観光」研究にとって、世界経済システムの中核に住み、その恩恵を受けている人びとが観光者として半辺境や辺境に出かけ、いかなるまなざしをもって人びとの生活や歴史文化、自然を見、接しているのかに関する研究が主要な研究課題であるといえる。いかなる観光スポット、いかなる観光活動や体験が提案され、発展してきたかは興味深い問題提起となる。そして、観光に関連するまなざしは基本的にはオリエンタリズム的視点と重なり合うことが予想される。ザイードが析出したオリエンタリズム的な視角を射程に入れた研究が期待される場所である。

オリエンタリズムとは、西洋（オクシデント）の東洋（オリエント）に対する優越的な言説をさすが、19世紀初頭から第2次世界大戦まではイギリス、フランスとがオリエントおよびオリエンタリズムを支配していた。第2次世界大戦以降はアメリカ合衆国がオリエントを支配し、かつてのフランスやイギリスと同様なやり方でオリエントにアプローチしている（Said：5）という。ザイードはその研究の最初の分析対象として、イギリス人政治家が1910年、「いかなる権利があつて（イギリスは）、東洋人と呼ぶ人びとに対して、優越的態度をとることができるか」という同僚政治家の問いに答えて行った演説を扱っている。その演説の論旨を示すと次のようになる。

われわれは他のどの国の文明よりも、エジプトの文明についてよく知っております。エジプトの文明についてははるか遠い昔のことでも知っており、ことさらに親しみもっております。エジプトの文明は、私どもの国のちっぽけな歴史に比べると、はるか彼方の過去に起源を持ち、私たちの歴史がまだ姿を現さない先史時代に、すでにその頂点を過ぎていたのであります。…西欧諸国民は歴史に姿を現すやいなや、たちまち自治能力の端緒を示すことによって、自らの真価を発揮したのであります。しかるに東方における東洋人たちの歴史の全体を一通り調べればよろしい。自治の存在した痕跡などまったく見あたらないのであります。彼らの偉大なる幾世紀はおしなべて専制、つまり絶対的な政府のもとで経過したのであります。文明に対する彼らの偉大なる貢献は、すべてかの専制的統治形態のもとでなされたものであります。…エジプトにおいてわれわれの責任において引き受けている統治の仕事は、哲学者にふさわしいものではなく、必要なだけの労働に精を出す汚い仕事、劣等な仕事なのです。これら偉大な諸民族にとっては、その絶対的政府が西洋のわれわれの手で機能せしめられる

ことこそ、望ましい事態であるとは言えないでしょうか (Said: 32-33)。

ここに示された態度こそ、西洋が東洋に対して示したもので、植民地支配を正当化する論理であり、オリエンタリズムと呼ばれるものであった。「世界経済」の中核たる西洋から、辺境である東洋にやってくる観光者たちのまなざしがこのオリエンタリズム的視点に基づいていることは容易に想像がつくことであり、われわれの研究においてもこの点からの分析を忘れてはならない。

2. 日本を中心とするアジア観光

日本を含む東アジアやその他アジア諸国に対する西洋からのまなざしを考えると、二重のまなざしの構造があることに注目しなければならない。ヨーロッパ「世界経済」システムの中核の一角を占めることになった日本は、欧米からのオリエンタリズム的なまなざしを向けられる存在であると同時に、半辺境あるいは辺境に属するアジア諸国に対して優越的なまなざしを向けることになったのである。アジア諸国は欧米からだけでなく日本から見られる存在であることになる。こうした構造のなかで国際観光研究には次のような一連の問題提起がなされるであろう。

日本を訪れる欧米からの国際観光者はいかなるまなざしを日本に向けているのであろうか。日本はいかに発見され、見られているのであろうか。日本人国際観光者たちはアジアをどのようなまなざしをもって見ているのであろうか。逆に見られるアジア諸国は日本や欧米のまなざしにどのように対応しているのだろうか。また日本はいかに対応しているのだろうか。

ヨーロッパ「世界経済」に組み込まれて以来開始された近代的国際観光の目的地となった日本やアジアで、欧米からの観光者はいかに対応したかに関する分析は興味深い。また、19世紀末以来韓国や満州、台湾等への国際観光を行うようになった日本人のまなざしに関する研究も期待されるところである。さらに、日本帝国主義崩壊以後、新たなアメリカ合衆国を中心とする世界システムの中における国際観光の展開および発展に関する諸関係に関する研究も構想しなければならない。そしてきわめて現代的課題となっている観光立国論への寄与も意識しなければならない。

参考文献

- 荒井政治『レジャーの社会経済史－イギリスの経験－』東洋経済新報社、1989年
Böröcz, Jozsef, "Leisure Migration: A Sociological Study on Tourism." Pergamon, UK, 1966
Boyle, Richard, 'Bella Woolf: Seeing the Exotic Other', (Bella S. Woolf, "How to See Ceylon" A Visidunu Publication, 2002)

- Braudel, Fernand, *"La Méditerranée: et le monde Méditerranéen à l'époque de Philippe II"* Armond Colin, 1966 (= 浜名優美訳『地中海 (I～V)』藤原書店, 1992年)
- Braudel, Fernand *"Civilisation Matérielle, Économie et Capitalisme, XV-XVIII Siècle: tome 2"* Librairie Armand Colin, Paris, 1979 (= 山本淳一訳『交換の働き 2 物質文明・経済・資本主義 15-18世紀II』みすず書房, 1988年)
- Braudel, Fernand and Folco Quilici, *"VENISE"* Les Editions Arthaud, Paris, 1984 (= 岩崎力訳『歴史紀行 都市ヴェネツィア』岩波書店, 1990年)
- 藤沢道郎『物語イタリア史-解体から統一まで』中央公論社(中公新書) 1991年
- Goethe, J.W. *"Italienische Reise"* (= 相良守峯訳『イタリア紀行 上』岩波書店(岩波文庫), 1942年)
- 川勝平太『日本文明と近代西洋-鎖国>再考』日本放送出版協会, 1991年
- 川島昭夫「リゾート都市とレジャー」角山榮・川北稔編『路地裏の大英帝国-イギリス都市生活史-』平凡社, 1982年
- 駒井洋『国際社会学研究』日本評論社, 1989年
- Lead, Eric J., *"The Mind of the Traveler: From Gilgamesh to Global Tourism"* Basic Book, New York, 1991 (= 伊藤誓訳『旅の思想史-ギルガメシュ叙事詩から世界観光旅行へ』法政大学出版会, 1993年)
- Löfgren, Onvar., *"On Holiday: A History of Vacationing"* University of California Press, 1999
- Löshburg, Winfried *"Und Goethe War Nie in Ggriechenland: Kleine Kulturgeschichte des Reisens"* Gustav Kiepenheuer Verlag GmbH, Leipzig, 1997 (= 林龍代・林健生訳『旅行の進化論』青弓社, 1999年)
- Martindale, Don, *"The Nature and Types of Sociological Theory"*, Boston, Houghton Mifflin Company, 1960 (= 新睦人訳『現代社会学の系譜』未来社, 1974年)
- Said, Edward W., *"Orientalism"* Georges Borchardt Inc., New York, 1978 (= 今沢紀子他訳『オリエンタリズム』平凡社, 1986年)
- 富田昭次『ホテルと日本近代』青弓社, 2003年
- Urry, John *"The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies"* Sage Publications, London, 1990 (= 加太宏邦訳『観光のまなざし-現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局, 1995年)
- Veblen, T.B., *"The Theory of the Leisure Class"* 1899 (= 陸井三郎訳『有閑階級論』河出書房・世界大思想全集, 1956年)
- Wallerstein, Immanuel, *"The Modern World - System: Capitalist Agriculture and Origine European World - Economy in the Sixteenth Century"* Academic Press, New York, 1972 (= 川北稔訳『近代世界システム-農業資本主義と<ヨーロッパ世界経済>の成立 (I・II)』岩波書店, 1981年)
- Wallerstein, Immanuel, *"The Modern World - System II: Mercantilism and the Consolidation of the European World - Economy, 1600-1750"* Academic Press, 1980 (= 川北稔訳『近代世界システム 1600-1750-重商主義と<ヨーロッパ世界経済>の凝集-』名古屋大学出版会, 1993年)
- Woolf, Bella Sidney, *"How To See Ceylon"* A Visidum Publication, Sri Lanka, 2002